

Fate/RexProelium

sT油

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

”聖杯戦争”を求めた一人の男が成し遂げたひとつの結末。

この聖杯戦争は他のどの聖杯戦争より異質。何故なら…

”マスターのいない聖杯戦争”が、今始まる。

# 目次

◇ランサー	I	8
◇セイバー	I	4
ヴォルゴグランド		1



# ヴォルゴグラード

ある意味それは必然であつたのかも知れない。

願いを叶える器、それを求めた一人の人間の執念がそうさせた。

コレは語られることのない、誰にも知られない非公式の聖杯戦争。

寒風吹き荒ぶ広野。∴生命の息吹が薄いのなら荒野と表現するべきか。

そこにポツンと、どこにでもあるようで、そんなところに本来存在し得ない街があつた。如何なる道理かそこはガスも通い水も湧く。極めつけに電気設備も万全だった。住宅地も、工場も、オフィスも、駅も、空港も、公園もあつた。だが1つ、その街には決定的に欠けているものがあつた。

それは本来その街を成り立たせるものであり

それは本来その街を利用するものであつた。

つまり人間である。

ロシアにあるシベリアの荒野。そこには人間なしで完全に機能する街があつた。

70年程前、その地にまだその異界がなかつた頃一人の男が現れた。男は優れた魔術

師だった。しかしその男は魔術師になる前から生涯を通して追い求めているものがあつた。

” 聖杯 ” である。

幼い頃、男は小さな集落に住んでいた。しかし突然なんの前触れもなくその集落は焼かれた。たつた数人の人間によつて。男は親を殺されながらも命からがら逃げ出すことに成功した。逃げながら男の頭は襲撃者の言つていた言葉を反芻していた。

「願いを叶える器」

そうなんでも言つていたのだ。その器をセイハイとも。

男は逃げおおせた後独学で魔術を学んだ。その時の男を突き動かしていたのは復讐心ではなく探求心だった。己の生活を理不尽に奪つていったものの正体を暴く。その想いは復讐とは別の次元にあつた。

時は過ぎて男は聖杯戦争のシステムについて理解していた。それが自分一人では到底不可能なことも。

聖杯の具現に足る霊基もある。英霊の召喚に差し支えない霊脈もある。…しかし最後のピースがなかった。

男は慟哭した。絶望した。だが諦めはしなかった。

その執念はどういう因果か何十年も後、実を結ぶことになる……。

その街の名はヴォルゴグラード。

本来何も存在しない場所に存在するユートピア。

そこそこが今回の：”マスターのいない聖杯戦争”の舞台だ。

協会や教会、時計塔の干渉すらはねのける孤高の地で召喚される英霊達はどのような

”英雄”なのだろう：

『聖杯戦争システム起動。同刻に英霊召喚システムFateを起動。オールグリーン。魔力貯蓄量規定値クリア。不干渉用結界作動。仮令呪の作動を確認。召喚システムに異常なし。セイバー、アーチャー、ランサー、キャスター、ライダー、アサシン、バースーカー共に召喚に異常なし。これより聖杯戦争を開始します』

## ◇セイバー I

ある王達の話をしよう。

それは護国の王、

それは毒の根源の王、

それは信仰の王、

それは征服の王

それは破壊の王、

それは騎士の中の王、

それは英雄の頂点に立つ王、

本来、合間見えることのない王達は1つの「戦争」に集結する。

各々の王道を貫く。それがこの「戦争」の最大条件であり、唯一条件。

主人無き従者になるのは、この「戦争」において主人は無力だからである。能力的な面ではなく、器の問題として。

さあ……聖杯「戦争」を始めよう。



(■■■■…………貴方を…愛している……)

私が喚び出された数々の戦いの中で、唯一愛したマスター。その名を、私は思い出せないでいる。顔も、声も、背格好も、癖も、彼と過ごした日々は何一つ思い出せない。覚えているのは、その時の胸の高鳴り、そしてこの手に残る温かさ…。

私はサーヴァント。所詮、戦いの道具に過ぎない。それは解っている。だが心の中の、像を塗り潰された彼が、それは違う、と言っているような気がする。たかが使い魔風情が自律神経失調症の真似事など、と思う。思うがしかし……。

私は今もまた、かの聖杯に導かれ戦場へと降り立つ。体が構築されていくのを感じながら、私は聖杯に願うことを考えていた。

目を見開くと、そこは小さなあばら家。ざっと見回したところ、人の姿はなく、ネズミが一匹慌てたように走っているだけだ。

「……………」

もう一度、小屋を見回す。ネズミのキイという鳴き声がやたら大きく響いた。

(な、何か理由があつて姿を隠しているのかもしれない)

そう思い声を出す。

「問おう。貴方が私のマスターか」

返事はない。声と同時に思念も送っているので聞こえている筈…とここで一つの異常に気付く。

(パスが…感じられない…？いや、これはパスが土地と接続している…？)

本来、マスターとサーヴァントを繋ぐ霊的パスが何故かこの土地を流れる霊脈と通じているのだ。確かに理論的にはそれでサーヴァントの現界は可能だが、これではマスターとサーヴァントの関係が崩壊してしまう。

(まあ問題ないでしょう。これはマスターのいない聖杯戦争なのですから…。??マスターのいない？)

どうもおかしい。記憶と経験に矛盾がある。だがそれもすぐに理解した。

(聖杯から与えられた知識…)

そう。聖杯戦争に喚ばれるサーヴァントはルールと最低限の情報を召喚時に記憶に刷り込まれるのだ。つまりこの聖杯戦争においてはマスターがいないというのは何ら異常なことではなく、それこそがこの戦争の主旨という訳である。

納得はしても理解はし難い。そもそも聖杯戦争とはマスターが願いを叶えたいがために協力者であり使い魔であるサーヴァントを用いて行うものではなかったか。

色々思うところはあるが、一先ず体勢を整える必要がある。そう思い、あばら家から外に出た。

一瞬、自らの終焉の場所、カムランの丘に見えたがその丘の向こうにみえる近代的な建物でここが現代の都市であることを実感する。

私はその人気のない都市へと歩みを進めることにした：

## ◇ランサー I

トランシルヴァニア地方、トゥリファスの『領王』はロシアの西方に位置する都市に喚び出された。

「ふむ、この地脈は……」

彼は彼自身のスキル、『護国の鬼将』により喚び出されたその都市の地脈を完全に確保した。なればこそ、わかったのである。

「この地脈は、いやこの地は、

他の地と明らかに異なっている、か」

そもそも、『領王』は現界したその直後より、『違和感』を感じていた。

いや、それが視えていた。

この地の『違和感』は地脈を支配し、力を得る彼だからこそ理解しえた……訳ではない。

彼でなくとも判るような、理性のない狂戦士でさえ解るような単純且つ、根幹的な『違和感』。

「やはりこの地に余のマスターは居らぬ、か。いや、それだけでは無いな。この地には」

生命”が無いのか」

そう。この都市には「生命」が微塵もないのだ。けして小さな都市ではない。百万の人が闊歩する大きな都市であるはずなのだ。

しかし、塵殺されたわけでもなくただ『無い』のだ。

「されども血の匂いはせぬ、と」

生前、彼は飽くほどに嗅いだのだ。

戦でおおる兵の血の匂い。

裁かれた逆臣の血の匂い。

そして、串刺しにされた帝国の兵どもの

血の匂い。

その匂いが一片たりともしないのだ。

「されど、されど。……匂うな、この地は」

そう。この「空気」に血は匂わない。

だがこの「地」には血が匂う。いや、血の匂いしかなないのだ。

マスターの居ない聖杯戦争。

「生命」のない大地。

無臭の宙。

血が色濃く香りたつ“地”。

依代無く現界し続けるこの霊体。

その答えの一端を『串刺し公』は諒解した。

「そうか、そういうことか。…この地の生命はこの地に喰われたのか」

彼は恐るべき事実を、畏るべき現実を口にした。

しかし其れはどうしようもなく現実。

故にこの地の地脈は、

百万もの人を喰らったこの地は

“奇蹟”を起こし得るのだ。

魔術師に限らず、只の人間でさえ生命力は魔力になるのだからー

彼はその聡明なる頭脳に得た情報から推測し、確固たるものを纏めた。

「成る程。この地にマスターが

居らぬのではなく、“この地がマスターのようなもの”ということか。なれば、この

地より出ることは叶わぬか。まあ良い。しかし……」

そう虚空に言葉を発した彼の顔は

哀しみと自嘲が混ざった表情であった。

仮令、其れが自らの国でなくとも

其れが自らとなんら関係のない地で  
あろうとも

領土を護るのが彼の英霊としての在り方

彼の『領王』としての在り方なのだ。

だからこそ、彼は虚空に発した言葉を継ぐ

「護る命が無いというのに『護国の鬼将』とはな、ふん、笑い話にもならぬな」

【シークエンス・カズィクルベイ・の遂行完了を確認。同刻、ネクストシークエンス・アレクサンドロス・の遂行準備完了を確認。現刻より、遂行を開始します】